路地を味わう

表題は朝日新聞 10 月 31 日。路地歩きが好きだ。10 年近く前、このあたりを卒業生と歩いたことがある。懐かしくもあり、路地ならではの魅力を伝えたい。

JR、つくばエクスプレスなどが乗り入れる東京都足立区の北千住駅。雑踏を抜け、東に 7〜8 分歩くと、住宅や商店が密集した柳原地区がある。10 月の午後、グラフィックデザイナーの高橋美江さんに案内してもらった。高橋さんは「絵地図師・散歩屋」の肩書きをもつ町歩きのプロ。カルチャー教室のまち歩き講座の講師を務めるほか、地域の情報を書き込んだ「絵地図」を、柳原をはじめ 200 点以上描いている。

路地とは「人家の間の狭い道路」。辞書にはそうある。柳原の町を歩いていると、高橋さんが指を指した。「ほら、あれ見て」。木製の柱に、かさ付きの電球。住民から「木電気」と呼ばれている外灯で、地域のシンボルだ。昭和の雰囲気を醸し出し、柳原の夜を優しく照らす。目を上に向けると空が細く見える。迷路のようで、方向感覚を失う。記者が絵地図で現在地を確かめようとすると、高橋さんは「迷うのも路地のだいご味ですよ」。色とりどりの鉢植え。ネコの声。夕飯の支度の匂い。地図を閉じて感覚を澄ませると、柳原の暮らしが身近に感じられた。

路地歩きでは民家のそばを通ることもある。敷地に無断で入らない、大声を出さない、ゴミは持ち帰るなど最低限のマナーは必要だ。つづいて商店街へ。幅 5 メートルほどの道路にパン屋や飲食店が並ぶ。精肉店の店頭には焼き豚やシューマイが並び、香ばしい匂いについ誘われる。メンチカツ 79 円、大きい割に安い。買い食いやお土産選びも路地歩きを盛り上げる。お店で会話をすれば、地元ならではの情報や土地の歴史を教えてもらえることも。商店街にあるうなぎ屋「ゑびす屋」にも、路地歩き目的の客が時折やってくる。3 代目店主の小倉敏正さんがこんな話をしてくれた。ある日、店を訪れた 2 人組に柳原の見どころや木電気について小倉さんが話をした。すると後日、その 2 人がお菓子を持ってわざわざお礼にきた。「こうした人とのつながりってのは、うれしいよね」高橋さんの絵地図には、愛らしい人の顔が載る。「観光地と違い、路地には人の暮らしの匂いがあって、懐かしさや心地よさを感じる。路地歩きのいちばんの魅力は、そこに住む人との温かい交流なのではないでしょうか」

（2016 年 11 月 9 日）